

洞戸橋右岸河川敷埋め立てによる「関市西ウイング拠点構想」

関市の西ウイング（洞戸、板取、寺尾地区）の広大な地域を効率的にとりまとめ、住民の安心と安全を確保しながら地域の文化と観光資源を活かした活性化を図るには、個別の地域価値を高める施策と併せ、これを象徴的に内外に明示する拠点が必要だと考えます。

西ウイングは過疎化と高齢化が進行し人材が急速に失われつつあります。今後の市政を占う第四次総合計画を策定中のこの機を逃し、西ウイング地域の諸問題に対し近視眼的な対症療法のみで終始することは、この地域が地域再生への手立てを失し市の負の遺産としてその弊害を深刻化させる危険性をはらみます。

以下に拠点構想の論拠お示しいたしますので、この拠点構想を前向きにご検討いただき洞戸橋右岸河川敷の払い下げに向けて、早急に行動をおこしていただきたく、ここに関係各位に強く要望いたします。

＜文責＞ NPO 法人洞戸村ふるさと塾 理事会

○ 観光の拠点

洞戸地区の洞戸橋付近は古来よりの交通の要所です。

関市武芸川町から寺尾坂を上る関市ルート

国道１５６号から県道８１号を上る美濃市ルート

岐阜市から通じる国道２５６号の岐阜ルート

更に、タラガトンネルを貫ける郡上ルートも加わりました。

板取川河畔にあるこの地域は、市が推進する西ウイングの観光地や施設を巡るうえでの玄関口として、最も存在感を示すことのできる最適で唯一の場所です。

これより北では谷や山は徐々に陰しくなります。板取川流域を巡り、川浦や高賀地区を始め各地の観光名所へと行き交う観光客にとって、清流板取川のほとりの落ち着いてそれからの旅路に備えることができる適所は他にはありません。

市は西ウイングにおいて滞在型観光を目指していますが、滞在型観光地にこそ下記に述べる観点も加え、滞在の基地となる拠点が不可欠だと考えます。

ここに道の駅の移転を図ればその売上は倍増が見込まれ、中長期的にみて地域を支える資金源の柱になりえます。

○ 防災の拠点

関市が総面積の半分をしめる広大な西ウイングの住民や観光客の安心と安全を確保せしめるには、不慮の事故や災害時における資材の搬入や救済本部の設置、救助ヘリなどの効率的活用の面からも、本庁から３０分と近距離で板取地域にも近い洞戸地区中央部に備蓄

基地や避難所を兼ねる防災拠点を置くことが、最善であり地の利に適っています。災害に備える西ウイングの防災拠点に関しては、特に早急な対応が望まれます。

○ 生活物資の供給拠点

過疎化の著しいこの地域では、合併後、雑貨や食料品店の撤退が相次ぎ、生活物資が容易に手に入らず、住民は元より観光者にとっても不便きわまりないまちとなりました。観光拠点に生活物資の供給機能も併せ持たせることで、生活者や観光者に利便性と安心感を提供し、中長期の滞在や定住による人口増加などに寄与することができます。

○ 公共交通の拠点

公共交通の効率的な運営は市の大きな課題の一つです。ここに基幹バスの発着拠点を置き、西ウイング内を巡るデマンドタクシーと連携させることで、住民や観光者にとって有効なターミナル基地となり、効率的な西ウイングの交通網の構築が可能となります。交通拠点には憩える場所が必要であり、乗り合い所を兼ねる観光案内所等を設置することで、その相乗効果は絶大です。

○ 住民の夢と協働を紡ぐ拠点

経済、交通、防災など、生活と観光の拠点ができれば、地域の活性化への道が開けます。ここに集う人々は既存の施設と連携を図りながら、協働して地域の農産物や特産品、自然や文化を発信することができます。ここを中心にした活性化と自立への様々な知恵が生まれることでしょう。西ウイングが市の「自然や文化の共生交流ゾーン」として、その真価を発揮するための大きな力、施策になります。

○ 建設と費用

洞戸橋右岸河川敷は伊勢湾台風以降、遊水地と化した事もなく、拠点構想を担う場所は総合的に判断して他にはないことから、熱意をもって対処すれば、市が払い下げを受けることや河川浚渫と絡め早期に埋め立てを行なうことなども可能であると思われます。

造成については、残土や砂利捨て場として関係機関の協力を得れば、事業費の計上なしに成しうる可能性があります。

建設に関しては身の丈に合った事業規模とし、合併特例債や過疎債、防災や町づくり助成金等を充て、地元企業の協力も得て、地域の将来に危機感を持つ多くの地域住民と協働すれば、実現可能な価値の高い事業となりうると確信します。

以上